

ローマ、2011年6月27日 (ZENIT.org)

ベネディクト16世は、ナチスに殺された三人の司祭と一人のプロテスタントの牧師は「人類と希望に対する偉大なエキュメニカルな証」であると言われた。

教皇はこの日曜日の正午、聖ペトロ広場に集まった信者とともにのお告げの祈りを祈った後で、土曜にドイツのリュベック市で列福された三人の司祭に言及した。1943年11月10日にギロチンで殺されたヘルマン・ラング神父、エドワード・ミュラー神父、ヨハネス・プラッセク神父とルター教会の牧師カール・フリードリヒ・ステルブリックの三人である。

「福音の輝かしい証人であるこれらの殉教者のために神をたたえましょう」と招き、さらに「神はこの上なくよいお方で、私から恐れを取り去られ喜びと希望をお与えになりました」というプラッセク神父の手紙を紹介された。教皇によれば、神父が牢獄の中から天国を示し、信者たちに喜びを分かち合うように招いていた。

列福式は、ベネディクト16世の代理として、列聖省の長官アンジェロ・アマト枢機卿が司式し、説教はキリスト教一致推進評議会の前長官ウオルター・カスペル枢機卿がした。枢機卿は「この四人はキリスト教徒であるとはどういうことかを教えてください。それはイエスがいるところにおいて、イエスとともに生き死ぬことです」。今日も「私たちはこのような気概をもった男女を必要としています。と言うのは、現在キリスト教徒は世界の中で最も迫害されているグループだからです」と言われた。

三人の列福調査を担当したアンドレア・アンブロシ師は、以下のように三人のプロファイルを語る。

○ヨハネス・プラッセク Johannes Prassek



神父は司祭に叙階された日、自分を「最も幸せな人間」と言った。今から100年前にハンブルクに生まれ、フランクフルトのイエズス会の聖ゲオルグ大学で勉強。1935年、オスナブリュックの大神学校に入学し、二年後司祭叙階を受けた。

最初の仕事は、メクレンブルクのヴィッテンブルクの助任司祭で、1939年リュベックの小教区の助任司祭になり、その後主任司祭になる。まもなく信者の愛情を勝ち取る。彼は肉体的精神的に倒れる寸前まで、司牧に邁進した。すぐに説教師としての評判が広がった。「日曜日の説教は非常に印象的で、無数の信者だけでなくゲシュタポのスパイまで魅了した」と言う。

友人の中には、神父がする体制批判は少々過激すぎるのではないかと忠告する者もあったが、プラッセクは意に介さなかった。真実を話すのが義務だと考えていたからである。

神父は体制批判をするだけでなく、リュベックに強制移住させられたポーランド人を助けようと、ポーランド語の勉強を始めた。1941年にプロテスタントの牧師と知り合った。彼とはとても気が合い、牧師はカトリックの勉強がしたいと言った。しかし、この男はゲシュタポのスパイであった。この男が手に入れた情報をもとになって、神父は1942年5月18日に逮捕された。

こうして、ブルグクロステルの監獄(今日では博物館になり、この名前を冠している)に連行された。飢えと寒さの劣悪な環境の中で、裁判を受けるまで一年以上の間ここで過ごした。神父は消化器官が弱かったので、そこでの生活で体をひどくこわした。しかし、その間多くの手紙を書いた。

「監獄の辛い生活と死刑を待つという心理状況にもかかわらず、プラッセクは信仰を失わなかった。

彼の愛情は監獄の同僚を慰めることに注がれた」と言う。処刑の日、家族に手紙を書くことを許されたが、それらの手紙は激しいナチス批判の内容のために破棄された。「ギロチンが、勇気と信仰のおかげで耐えることができた最後の苦しみに幕を引いた」と言う。

○ヘルマン・ランゲ

アンブロシ師は彼を「神学以外にも非常に秀でた博学な知識人の司祭」と定義する。1912年、フリジア東部に生まれる。新しいドイツと呼ばれたカトリック学生連盟に入る。ロマーノ・グアルディーニの作品に深い影響を受け、グアルディーニの思想に忠実に従う。1931年にはミュンスター大学の神学部で学び、のちにオスナブリュクの大神学校に入学。1938年に司祭叙階。1939年にはリューベックのイエズスの御こころ教会で司牧を始めた。



アンブロシ師は「ランゲ神父はこの上なく細かいところまで説教の準備をした」と言う。「そのうえ、毅然としていると同時に、優しく、人間的な面において細やかな人情をもった人であった。その人となりは完全な調和を保っていた」

繊細な感受性を持ちながら、神学的知識においても群を抜いていた。そして、ナチスの体制に対して決然と反対を表明した。

当時この体制に奉仕していた若い兵士と話し、カトリック信者なら戦争においてドイツ軍の中で戦うことはできないと明快に言った。

恐れることなく反体制の書き物を配っていた。1942年リューベックの町が初めて空爆を受けたとき、命の危険を顧みず、信者たちの安全のために走り回った。

1942年6月16日にゲシュタポに逮捕される。「人民裁判所は、祖国に反逆し、敵側を支援し、ラジオにより犯罪を働いたという罪状で、他の司祭とともに死刑の判決を下した」、それは神父がラジオの番組で反体制の考えを広めていたからである。

独房ではシュベントゥナーというプロテスタントの牧師と同居したが、彼と兄弟のように付き合った。

神父の手紙には神がお許しになることへの神妙な服従と深い宗教性が見られる。判決が出た日に両親に書いた手紙には、「この手紙が届く頃には、私はもうこの世にはいないでしょう」とある。「今日は父の御国への偉大な帰還の日になるでしょう。その後、この世で私の近くにいた人々みんなに会うでしょう」

神父の手紙について、1929年にノーベル文学賞を受賞したトーマス・マン（1875~1955）は、それは「キリスト教信仰、カトリック信仰の最も美しい証である」と称えた。

○エドワルド・ミュラー

四人の殉教者の中で、ミュラー神父は苦しい青年時代を過ごした。1911年に貧しい家族に生まれた。ネウミュンスターのカトリック学校で勉強した。7人兄弟の末っ子で、父親は家族を捨てて出て行った。大工になるが、小さいときから司祭になりたいという望みを抱いていた。小教区の親切な信者数人の支援のおかげで、中学校を卒業できた。その後、ミュンスターで神学校に入り、1940年に司祭に叙階。リューベックの御心教会で司牧に当



たる。

「神父の落ち着いた優しく謙遜な態度が、当時の証人から高く評価された」とアンブロシ師は言う。

「なかでも、労働者や職人のよき理解者として有名になった。実際自分の育った環境の人々と心を通わせることは、神父にとって容易なことであった。

リュベックの四人の殉教者の中で、ミュラー神父は最も政治色が薄い。にもかかわらず1942年7月に逮捕された。死刑判決が下った後、こう書いている。「私は自分が決して騙されていなかったことを確認するだろうと希望している。それどころか、いつも変わらぬ率直な心で、キリストが、私が生きるにつけ死ぬにつけ、キリストが私の愛によって栄光をお受けになることを希望している」と。

この三人は3分の間を置いて、一人ずつ処刑されていった。